

迫水小学校算数研究の歩み

本校は、平成3年度に、重味小学校と水源小学校の2つの小学校を統合し開設されました。以来18年間、算数科学習に焦点を当てて研究を進めてきております。

基礎・基本の指導の徹底および個性を生かす教育の充実、並びに学ぶ意欲と急激な社会の変化に主体的に対応できる「生きる力」の育成を掲げた学習指導要領のもと、本校は研究を進めて参りました。

平成3・4年度：子どもが自ら課題を追究していく算数科学習をめざして

平成3年度は子どもの実態把握から始め、課題意識の不足が明らかになりました。

このことから、平成3・4年度は研究主題を「子どもが自ら課題を追求していく算数科学習をめざして」とし、課題の設定・課題の追究の過程を中心に研究を進めました。

平成3年度は、子どもが解決を自分のものとしてとらえるために、課題設定の過程を中心に、

- (1) 子どもに解決してみたいというような意欲をわかせる素材・導入問題づくりの工夫
- (2) 子どもが課題を自分のものとしてとらえるような課題設定・課題把握のさせ方に重点をおき、

平成4年度は、子どもが意欲を持ち続けながら課題の解決に取り組むために、課題追究の過程を中心に、

- (1) 自力解決時における個に応じた指導の工夫
- (2) 協同解決時における「子どもの考えに立った学習の構成」の工夫

に重点をおきました。

しかし、子どもたちが問題を解決していくための思考力・判断力・表現力や、最後まで粘り強く追求しようとする態度にまだ不十分な面があるという反省が出されています。

平成5～10年度：子どもがいきいきと問題解決に取り組む算数科学習

そこで平成5年度から6年間、研究テーマを「子どもがいきいきと問題解決に取り組む算数科学習」と設定しています。

まず、平成5年度はサブテーマを「新しい学力観に立った授業をめざして」とし、自ら学ぶ意欲、思考力・判断力・表現力の育成を重視した、新しい学力観に立った授業を創造していくことをめざし、

求める授業の姿・子どもの姿のあり方

- (1) 学習過程の工夫として
 - 子どもの十分な活動を確保するための時間の工夫
- (2) 指導計画の工夫として
 - 子どもの主体的な活動を重視した指導計画の工夫
 - 単元の見通しを持った指導計画の工夫
- (3) 評価の工夫として
 - 評価の観点の明確化
 - 評価の場と方法の明確化
 - 個人カルテなどの作成と指導への活用

と、大きく4つに重点を置き、子どもの発達段階に応じて明確化を図ってきました。

その成果として、見通しを持ってなんとか自分の力で解決しようとする子どもの態度が表れてきました。また、子どもの変容がわかるようになってきたとともに、授業の目標をはっきりととらえられるようになってきました。

しかし、子どもの側に立った指導観による学習指導が常に展開されてきたのだろうか、また、子ども一人一人が主体的な能力を確かに獲得してきたのだろうか、という反省がだされています。

そこで平成6年度はサブテーマを「子どもがとびつき・やりぬき・みがきあう支援の工夫」とし、

- (1) 学習方法の獲得のための支援
- (2) 本質に迫るための支援
- (3) 支援に生かす評価の工夫

に重点を置きました。

しかし、一人一人に自学自習の力がついてきているか、子どもの考えのよさを生かしているか、評価を支援に生かしているかという反省がなされ、

平成7年度にはサブテーマを「学んでいく力をつけ、一人一人のよさを生かして課題に迫るための支援の工夫」とし、

- (1) 学んでいく力を獲得するための支援
- (2) 本質に迫るための支援
- (3) 支援に生かす評価の工夫

に重点を置いています。

しかし、子ども同士の支援（相互支援）も必要且つ有効ではないか、個に応じた支援はどうか、よさを認め合いながら算数の本質に迫る支援はどうあるべきかという課題が残りました。

そこで、平成8年度はサブテーマを「互いのよさを認め合い、高めあう支援の工夫」とし、

- (1) 課題を解決していくための支援
- (2) 支援に生かす評価

に重点を置いて研究を進めてきました。

その成果として、自分達の力でなんとか解決しようとする姿や、それぞれの考えを高め合っていこうとする姿、また、友達のよさを認めながら、よりよいものを求めようとする姿が見られるようになってきています。

課題としては、

- (1) 課題をつかみ、それに迫るためのとびつく問題の開発が必要であること
- (2) 個の実態把握と個を生かす支援が十分とは言えないこと
- (3) よい考えを全体に広げるため、相互支援の場の設定や方法の習得のための支援が必要であること

が挙げられました。

そこで、平成9年度は平成8年度と同じテーマのもと、

- (1) とびつく問題の開発
- (2) 子ども同士の支援（相互支援）

に重点を置いています。また、その年に導入されましたT・Tについても教師の支援のひとつと考え、重点のひとつに加えて研究を進めました。

しかし、課題把握を一斉にさせようとしたために一人一人の子どもが自分で問題を分析する場が確保されてこなかったことや、主体的に求める子どもの姿が見られないこと、基礎・基本の定着が不十分な子どもが見られること、自分の考えに自信が持てない子どもがいること等が反省として出されました。

そこで平成10年度はサブテーマを「主体的な活動を引き出すための支援の工夫」とし、

- (1) 導入
- (2) 相互支援
- (3) 習熟・発展

の場に焦点を当て、研究を進めてきました。導入の工夫としましては課題把握の個別化に重点を置いています。

その成果として、わからない時に自分から支援を求めたり、難しい問題に対してもなんとか解決しようと粘り強く考える姿が見られるようになったこと、学習の課題を意識し、解決の見通しを持って取り組み、友達と互いに支援し合いながらよりよいものを求めていく姿が見られるようになったこと、また、主体的に授業に参加できるようになったことが挙げられました。

平成11・12年度：一人一人が自ら見つめ・求め・生かす算数科学習 ～算数的活動を通して～

平成11年度からは新学習指導要領のもと「生きる力」を育てるためには基礎・基本の徹底と、個を生かす授業づくりを図る必要があると考え、

- (1) 子どものよさや可能性が生きる導入の工夫
- (2) 互いのよさや可能性を認めあい、高めあう相互支援の工夫
- (3) 子どものよさや可能性が生きる習熟・発展の工夫

の3点に重点を置き、テーマも新たに

「一人一人が自ら見つめ・求め・生かす算数科学習 ～算数的活動を通して～」として取り組みました。